

# 横浜国立大学ギター一部沿革史

ギター部 部誌「アランフェス」及びOB会誌より転載

## 目次

頁			
2	(一) ー昭和37年夏から昭和38年春ー	アランフェス2号	1965-9-1 発行
	ーギター部の生い立ちと幼児期		原 臣司 (3期)
3	(二) ー昭和38年春から秋までー	アランフェス3号	1966-4-1 発行
	ーギター部少年期		榎本 武明 (4期)
5	(三) ー昭和38年秋から昭和39年春ー	アランフェス5号	1967-4-1 発行
			榎本 武明 (4期)
7	(四) ー昭和39年春から昭和40年春ー	アランフェス6号	1967-10 発行
			吉津 知 (5期)
9	(五) ー昭和40年春から昭和40年秋ー	アランフェス7号	1968-4-1 発行
			安藤 一之 (6期)
11	(六) ー昭和40年秋から昭和41年春ー	アランフェス10号	1970-3-12 発行
			安藤 一之 (6期)
12	(七) ー昭和42年春から昭和43年春ー	アランフェス10号	1970-3-12 発行
			中沢 国夫 (7期)
.....			
15	ギター部創成期の頃ー	横浜国大ギター部OB会誌第4号	昭和60年9月1日
			金 永雄 (2期)
17	ギター部沿革史ー	横浜国大ギター部OB会誌第6号	昭和62年8月15日
			池畑 久之 (4期)
20	ギター部沿革史ー	横浜国大ギター部OB会誌第6号	昭和62年8月15日
			吉津 知 (5期)

ギター部沿革史（一）—昭和37年夏から昭和38年春— 原 臣司

ギター部の生い立ちと幼児期

昭和37年6月のある日、清水ヶ丘の食堂やトイレにところかまわず“ギター同好会を作ろう。会員希望者は○日○時○番教室へ”という主旨のポスターが貼られていた。発起人は初代部長の金永雄氏で同時に、金氏と協力していた人に坪川氏と伊達氏が居た。

さて国大に初めてギターと言う字の入ったポスターが出てから数日後の○番教室には、果たしてギター愛好家(?)がわんさと三十人ばかり集まり、華々しい前途が期待された。この中には現在の4年生の数人が含まれていたことは言うまでも無い。すぐにギターの練習が始められたわけだが、もちろん現在のように、3万円クラスのギターなどあろうはずがなく、スチール弦が多く、貝なんかで安っぽく飾り立てたギターばかりで、キンキン教室内に音を響かせた訳である。その夏の合宿は行われず、ギター部の構内宣伝の場はその年の秋の大学祭のときであった。

激しく降る雨、発足間もないギター同好会には一部屋の教室すら与えられず、本館（もちろん清水ヶ丘）の裏の芝生の上にテントを立て、それ以来伝統となった洋酒喫茶の“ギターラ”が開店され、狭い演奏台の上では、教本の練習曲に等しいものまで演奏された。この開店のため、金氏の下宿から、タンブラなど食器はもちろん、これらを置く棚のために大型の本棚まで持ち出し、更にカーテンまで剥ぎ取って店内を飾ったことは特記すべきことであると思う。閉店後は演劇部の部屋をかり、残り酒で乾杯し夜遅くまで歌い騒いだことを覚えている。

この後の数ヶ月は当時2年だった金氏は、工学部に居た関係で、部員が集まると部長が居らず、部長が来ると部員が居なかったりしてメロドラマのすれ違いが多くあまり練習できずに冬も過ぎ3月になった。

この春こそは合宿をと金部長も張り切っていたわけだが、連絡不足などもあって集合場所の静岡駅に集まったのは金氏と坪川氏と筆者のたった三人であった。駅前の食堂で料理のできる間、ギターをかき鳴らし、店の客の目を引き果てはラーメン片手のウェイトレスを立ち止まらせたり、合宿場所の洞慶院というお寺では同宿していた東京の三人の女学生やヤマハ楽器の新入社員（社員教育をしていたらしい）など多数の人が集まり、弾く人も聴く人も楽しいひと時を過ごしたりしたと言うエピソードもこの合宿のことである。

それから一週間、いよいよ新入生が来ると言うので大騒ぎ。発会当初三十人もいた部員はわずか十人足らずとなっていた。本館講堂でのクラブ紹介では“禁じられた遊び”を金氏と坪川氏が重奏し、その後坪川氏の奏でる“アルハンブラの思い出”の優雅なメロディをバックに金氏の流暢な弁舌に乗って、十人足らずのギター部も部内充実した大クラブとなって紹介された訳である。こうして集まったのが現在の池畑君らの三年生なのである。

ギター部沿革史（二）－昭和38年春から秋まで－ 榎本武明

ギター部少年期

さて、前号はギタークラブの生い立ちと幼年期の話でありましたが、今回はその続きとして、我がギタークラブの少年期のお話を……。

私達が金さんの大演説と坪川さんのアストリアスにつられてギタークラブに引き込まれたのは、昭和38年の春でありました。入部してみると金さんの演説とは大違い、まだ生まれたばかりの小さなクラブで、上級生も十名そこそこと言った状態。見ると聞くとは大違いとは、まさしくこのことでありましょう。それでも一番初めの部会の後で、日の出町のなんと言う店でしたか、その二階で新入生歓迎コンパを開いてくれました。出席者は二十名程、私たちにとっては生まれて初めて経験する大学のコンパでありましたが、それは大層味気ないものでした。周りには誰と言って知り合いはありませんでしたし、上級生は何故かギターの話ばかりしていたからです。私などはたいしてギターが好きだったと言うわけではなく、ただうかうかと入部してしまった口なので、皆が、ギターとギター音楽の話ばかりしているのは、非常に疎ましく感じられました。その時集まったメンバーの中に後の石川、菊池、熊谷等の諸氏がいたわけで、石川氏などは二浪で福井さんの先輩とかで、無精ひげを生やして、金さんとはなにやらべらべらしゃべっておりました。その時に池畑氏の顔を思い出せないのは不思議なのでありますが、多分離れて座っていたからでありましょう。池畑氏に会ったのはそのコンパの数日後、清水ヶ丘の食堂の赤コーナーという場所でした。ついでですが、この赤コーナーという名前、誰がつけたのか気が利いているなど思いました。そのときの彼は学生服を首のホックまできちんと着て、金さんとクンパルシータだか、ベッサムムーチョだかを「あつ、それできます」などと言いながら合奏しておりました。こんなことがあってからぼちぼち本格的な練習が始まったのですが、先程申しましたように、部員は新入生を含めても三十名そこそこ、これも全員が出てくるわけではないので練習場の広さをもてあましていました。練習場は今とはなくなってしまいましたが、薄暗くてうなぎの寝床みたいに長かった十一番教室で、その教壇に長いすを持ち込んで、合奏の練習を致しました。これもついでですが、その隣の某所は私たちに言わせれば十番教室であります。基礎練習は四年の坪川さんと伊達さんによって個人的に行われていました。しかし、その個人教授は生徒のほうに逃げ回っていたので、まもなく自然消滅という形になり、結局合奏一本やりになってしまいました。何故こんなに初めから合奏ばかりやったかと言うと、それはとりもなおさず間近に演奏会を迎えていたからです。その神奈川五大学慈善演奏会の話もせねばなりません。

出来て間もないクラブでその上4月に入った一年生が主体の演奏技術で7月に国大代表で出るなんて今から考えれば信じられないことですが、金さん持ち前の積極さというか、押しの強さと言うか、何もわからない私たちをかり出して出演することにしてしまいました。当日の演奏曲目は皆さん御存知のアンダンティーノと月見草の花、それにオリエンタルダンスなど、他の大学は神大がハワイアン、防衛大が得意のブラスバンドをかって乗り込んでまいりました。まだ何も

わからなかった私達でも少しは向こうさんが素人離れしているくらいの事はわかりますから、「結構うめえじゃねえか」などとブルをかんで松村氏などと話し合ったことであります。この頃のことは実際今思い出すとじっと脇の下が汗ばんでくる思いが致します。

そうやって何がなんだかわからない内に夏休みになりました。我がクラブでも一応クラブと名がつくからには合宿くらいやらなくちゃあカッコがつくめえということで、勇躍池畑、菊池両氏が合宿地の下見にまいりました。池畑という男は昔からこういう事をやらせると絶大な才能を発揮する男でありまして、うまい具合に群馬県は鹿沢という所に話を落ち着けて来ました。この鹿沢は去年の夏行った鹿沢と同じ鹿沢であります。またこの視察旅行中に両氏旅館の女中さんとビールを酌み交わし、うまいことをやったという話も伝わっていますが、そんなことはどうでもいい事でありますよ。

合宿、九月一日から始まり、総勢20名、うち女性6名—これらの女性方は後に全員やめてしまわれましたが、今思えば非常に残念な事をしたと思っております—昼間は班別に真剣に基礎練習と合奏の練習を行い、夜は一同一つの部屋（あの二階の大きな部屋です）に集まって二手に分かれてインスピレーションだとか誰が何をだとか全く子供みたいな遊びを毎晩続けたのであります。合宿の一週間のうち一日を割いてハイキングにも出かけました。昨年も登りましたが、例の湯の丸山頂上を目差して道なき道を直に登ったのであります。この時一着になったのが例の金さんで、この先輩は何をやらせてもすごかったんですね。特にその指導力と押しの強さは天下一品でした。金さんが一声発すれば黒いものでも、「えー白かったのか」と思わせるものがあつたのであります。池畑氏などはさしずめこの先輩の血を引いた最後の部員じゃあないかと本人も言っていますし私も同感であります。なおこのハイキングの時、竹本さんが先の女性六人をさながら機関車のごとく引率してあのヤブの中を抜け頂上を極めさせるに至ったことは伝統的物語として特筆すべきことでありましょう。

こうして合宿から帰ってまいりますとガククリ気落ちしてしまい、まもなく始まった試験もうわの空で受け流してしまったわけであります。そしていよいよ秋の大学祭が開かれました。音演祭のステージは先の慈善演奏会でグンと舞台度胸をつけた十五名のベストメンバーでなされたのですが、その時は何だか自分の音ばかり聞こえるようなので音を抑えておりましたら、他の人々もその様に感じたのでありましょう、えらくポリウムの小さな演奏になってしまい会場で演奏を聞いていた松村氏の言によれば「聞かれたもんじゃなかった」そうであります。一方これに対して模擬店のロシータの方は大繁盛でした。なにしろ食堂の内と外を利用した斬新でムードのあつた店でしたから、そこで女性を口説くヤツまで現れる始末でありました。

小生どうもスタミナの配分が悪く一年間を書きつくる予定でありましたが大学際のところで紙数が尽きてしまいました。続きはできましたら次号に。悪しからず。

ギター部沿革史（三）－昭和38年秋から昭和39年春－ 榎本武明

実は書記局の方からは、卒論のようなものを一つと言うことでありましたが、卒論と呼べるような論理的な文は書けませんので、中断されていた沿革史の続きを書くことでお茶を濁したいと思います。

ギタークラブが創設されたのが昭和三十七年の夏、私達はその翌年入部したのですから、今度卒業できれば、正味四年間をクラブで過ごした最初の卒業生ということになります。思い起こせば、様々のことがあったはずであります。四年も前の事となると記憶も薄れ、多くの出来事は忘却のかたに過ぎ去ってしまったかのように、おぼろであります。この沿革史も原さん、私と受け継がれて前々号でようやく幼年期の昭和三十八年、すなわち私達が入学した年の大学祭の話までこぎつけることができました。今回はその続きを・・・。

さしも賑やかだった大学際が終わると学園内は妙にひっそりとしてしまい、ギタークラブも一時の休息期に入るのが常であります。この大きな行事が終わってしまうと冬までこれと言った活動はありませんし、それに第一寒くて指のほうは動いてくれません。

小原先生を我がクラブの技術顧問にお迎えしたのは丁度こうした時期でありました。池畑君らがいつもの調子でかけまわって、実現したのですが、それまで楽器の持ち方も定かでなかった私達にとってこれはとても良い勉強になりました。とにかく新興の意気込みだけは盛んにあっても、技術が追いつかないような状態だったのでありますから。

最初は聖子先生と神田先生がいらしてくださいました。聖子先生は今でもそうですが、当時はもっと綺麗で可愛らしく、部員一同、気の入れようは大変でありました。特に部長の金さんなどは、ずいぶんと張り切っていたようですが、残念ながら詳しいことは存じません。後に先生は田島、渡辺両氏に代わり、多くの方はがっかりしたのでありますが、とにかく毎週水曜日には今は無き十一番、十二番教室で、個人練習を見ていただきました。十二月ともなるとうなぎの寝床の十一番教室はかなり寒く、守衛に内緒で石油ストーブを燃やし、それで指を暖めながら練習したのであります。（このストーブの出来が悪くよく火を吹いて危ないものだったので）

両先生の個人教授は途中中断はありませ居たけれど、ずいぶん長く続き、私が二年の頃まであったと思います。これも人数が三十人弱で少なかったからこそ出来たのでありましようが、現在この制度がなくなってしまった事を残念に思っています。

新年に入って、おそらくこの会でもやったのでしようが、霞がかかって記憶が定かではありません。三月に入ってお寺で合宿をやりました。第一回定演に備えて葉山の総福寺というお寺を借りて自炊しながら練習をしたのでありますが、なんだか一日中飯の支度ばかりしているような気持ちが致しました。それにそう広くない本堂に雑魚寝ですから汚いことおびただしく、小原先生がいらした時も布団がひいたままで先生はその上に乗って指揮をして下さったのです。

実際冷や汗一斗の思いでありました。最終回には伊達さんと坪川さんの追いコンを兼ねて酒宴の席を開きました。近所から菓子などを買ってきて、「御兩人おめでとうございます」などと言

いながら茶碗ご酒を酌み交わしたのです。酒は冷では体に悪いと言うので田中さんの発案でなべにいっぱいお湯のように沸かして、おたまですくって、まず一杯などと飲んだのであります。成り行きとして当夜の乱れようは筆舌につくし難く、川島は祭壇の木魚をさながらボンゴのように打ち鳴らし、金さんはフラメンコダンスを踊り、挙句の果ては火鉢でオーバーに大穴を開けて、松村はその足下で二日酔いの体たらく、寺の坊さんが怒鳴り込んでこなかったのが、今でも不思議であります。金さんという行動力はあるが、いささかしつけの悪い人間に率いられた我がギタークラブの面々、当時はずいぶん悪いこともやりましたが、みなのは気持ちはいつでもぴったり一本にまとまっていて、とにかく何でもやってやろうという意気込みだけはあったようです。

ギター部沿革史（四）－昭和39年春から昭和40年春－ 吉津知

原さん、榎本さんに続いて、古きよき時代のギタークラブの様子を紹介してみよう。

僕は兄が席を置いたことがあるので、以前からこのクラブの存在は知っていたが、実際に目で見ただのは、入学式のときであった。“名教自然”の近くで、背広を着てギターを抱え、部員を獲得している姿はまさしくキザというイメージを漂わせていた。それでもサークルオリエンテーションの時、全員が学生服で合奏した姿には何となく親密感を覚えた。

それと共に、ドン・ガバチョを負かすようなあの金さんの大雄弁術に思わず心を奪われ、入部した部員も多いそうだ。どんな楽しいことが待っているかと入部してみると、あにはからんや、クラブは第一回定期演奏会を前にして、てんでこ舞の忙しさで、折角の日曜日も出頭させられる始末。一寸文句も言いたくなかったが、それでも定演の当日は何となく嬉しくて、椅子の出し入れに右往左往した。この時、客演に招いた小原聖子さんを始めて拝見できたが、何とまあ可愛らしかったこと。この演奏会において、金、田中、竹本の三氏が独奏を行ったが、竹本さんの弾いたビラロボスの“前奏曲第一番”の出だしが何となく格好いいと部内で少しはやりかけた。定演の翌日、新入生歓迎コンパが桜木町に近い飲み屋で開かれた。順々に自己紹介をしてゆく。そこで何人かまた名前を覚える。自分の番に回ってきたとき、「僕は小学校のときから麻雀を覚えました」といったところ田中さんから早速今晚付き合え。と声がかかったのはいまだに忘れることができない。その週の土曜日、定演の反省会と共に役員改選が行われ、笹野さんが満場一致で就任。いよいよギタークラブも三代目の世代を迎えたことになった。その翌日、大磯の湘南平へ新入生歓迎ハイキングが催された。新入生の練習が始まったのはこの後で、現在は教育学部の図書館になってしまった11,12,13番の各教室がその練習場に当てられた。最初は主に金さんに教えてもらったが、そのうち田島さんと渡辺さんが講師として招かれ、毎水曜日個人レッスンを受けることになった。カルリの合奏曲“アンダンティーノ”を五線紙に写したのもこの頃で、専らアルペジオと半音階の練習ばかり。夏休みに入るまでに、二回コンパがあったが、その他にも何回か沈没して、先輩諸氏からいろいろクラブのこととか女性のこととか話を聞かせてもらい、悪知恵も段々つけられた。夏休みに入っても週一回練習が行われることになり、その内容は基礎練習と、カルリの合奏曲“アリアと変奏”の練習であった。真夏の太陽がギラギラと照りつけている清水ヶ丘の坂をギターを持って登ることは、汗をためた洋服の中に身体を入れるようなもの。それにこりて練習は二時からなのに午前中から登ったことも何回かあった。八月の初旬、尾瀬にキャンプを行ったことも楽しい思い出の一つ。総勢十四名であったが、夜、月の無い空に見えた素晴らしい天の川がいまだに頭の中に残っている。

夏休みも終わりに近づいた九月一日、待ちに待った合宿がいよいよ始まる。右手にギター、左手に大きなボストンバッグを持って上の駅に着いたのは集合三十分程前であったが、もうすでにかなりの部員が集まっていた。中にギターを持たずにこの合宿に参加した二年生が一人いたが、これはギタークラブ創立以来初めての事で、いまだに笑い話として残っている。最初の夜、ぼく

ら一年生が四人で寝ようとしているところに、三年生三名が押しかけてきて、そのうち一人が“猥談をやるならまかしといて”とか何とかいって、べらべらしゃべりだした。僕らも適当に相槌をうってニタニタしていたが、今となってみればこれも楽しい思い出の一つ。合奏練習は中々厳しく竹本さんのパートマスターは恐ろしくて仕方なかったこともあった。昼休みは猪苗代湖で泳いだり、卓球をしたり、テニスをしたり、休み時間二時間はフルに利用。帰る前日に行われた研究発表会に於いて、田中さんと池畑さんの二重奏“ファルッカ”が人気を呼んで、後日ギタークラブでしばらくはやった。最後の晩は男性はアルコールが少し入ったところで、現在は消失してしまったギタークラブならではのゲームが行われた。それは男性が二組に分かれて自分達の着ているものを結び合わせて長くしたほうが勝ちというもの。それ故に最後になると暗がりに乗じて最後の一枚まで結びつけるものも何人か出てくる。全く女性には見せられない光景だ。

秋の試験も成績云々はさておいて、終わると大学祭が近づく。音楽祭の合奏は僕ら一年にとっては初めての舞台、少々上がりながら無事終わると翌日から二日間ロシータの開店。最後の日に店仕舞をしてから、部員同士で飲み始めた。ジョニーウォーカーなどがあったりして、僕も調子付いて飲みすぎ人に迷惑をかけてしまった。

冬には御殿場で合宿が行われたが、参加人員はわずか十四名、大変家族的な雰囲気でも楽しい合宿の一つとなった。一泊三食付五百円と、べらぼうにやすい合宿場であったが、さすがに食いは少なく、笹野さんの友達に差し入れしてもらったり、町まで買出しに行つて飢えを忍んだ。

あくる年の正月元旦、僕ら一年四名で竹本さんの下宿先に年始の挨拶がてら、遊びに行った。前日から小山さんも泊まっていたし、後で笹野さんも来て大変賑やかとなった。このとき竹本さんが作ってくれた餅入りの味噌汁は大変美味しく、同時に正月気分を味わうこともできた。

後期の試験が終わると直ちに春休みに入るがそれと同時に強化練習が始まり、最後の日に金さんと田中さんの追い出しコンパが開かれた。いよいよ二年になるという実感がこみ上げてくる。

三月の終わり頃ギタークラブに籍をおいていた川嶋さん二年と猪俣さん一年とが婚約披露を開いたことは特筆すべきことだろう。僕は九州旅行していたので特急でかけつけた。学生結婚には幾分の抵抗感も感じないわけではないが、二人とも僕とは親しくしてくれたので祝福せざるを得なかった。

一方四月の声を聞くと同時に春の合宿が戸田で開かれた。定演がもうすぐだと言うことで皆良く練習した。夜食堂に行つておにぎりを盗んできたことも思い出す。明治学院のマンドリンクラブと親しくなったのはこのときで、戸田で開いた演奏会に僕らを招いてくれた代わりに僕らの合宿場に彼らを招いて交換会を開いたことに始まる。

春休みも終わり定演の練習をするとともに、新入生の受け入れ対策も準備された。ここで入部してきたのが現在の三年生だ。

ギター部沿革史（五）－昭和40年春から昭和40年秋－ 安藤一之

前号の吉津さんに続いて僕が一年のときのクラブの様子を紹介してみよう。大学では音楽サークルに入ろうと思って僕はどれにしようかいろいろ迷った末、理科館の二十一番教室で行われたギタークラブの説明会に出てみた。ギターについての説明があり、新入生、上級生がお互いに自己紹介をした。池畑さんが「ギターを買う人は一万二、三千円用意してください」とか「上級生になるとみんな三万、五万の手工品が欲しくなるものです」などと言ったときには「あの人アホじゃなからうか？」などと思ったものだ。ギターのギの字も知らなかった僕にはそんな高価なギターがあることすら知らなかったのでびっくりしてしまったわけである。次の日は上級生の練習の見学があった。小原安正先生が前で指揮棒を振っておられたのを覚えている。男の人と女の人が楽しそうに一緒に弾いているのを見て非常にうらやましかった。その日の夕方から新入生歓迎コンパがあり、また自己紹介させられた。親父みたいな人、かわいらしい人、キザな奴、いろいろな人がいる。酒に酔って上級生にからんでいる奴もいた。

四月二十二日の定演までは、上級生は忙しそうに合奏練習をしていた。新入生は班別に分かれて基礎練習である。始めは指がいうことを聞かずイライラしどうしであった。

そばでは、経験者とやらが半音階などすらやらやっている。定演当日、一年生はいろいろな仕事を分担してやらされた。僕は秋田君達と会場係をやっていたので、演奏は聞けなかった。当日のことで一番印象に残っているのは、ステージの上に下げるカンバンを加藤君と二人で清水ヶ丘から県立音楽堂までエッチラオッチラかついで行ったことである。

定演も終わり、総会で部長が池畑さんとなり、又新しい一年がはじまるわけである。すぐ反省コンパがあった。創立際には四重奏（吉津、後藤、井上、榎本氏）があった。体育祭では女子がリレーで入賞したが、男子はふるわず、僕などはパン食い競争に出てパンも食べられなかった。合唱祭では五位に入賞した。この頃からみんなの顔と名前がはっきりしてきて、部屋や食堂で新入生が上級生と談笑している姿がちらほら見られるようになった。またこの頃エル・ビートが流行し、秋田、川岸両君等は得意そうに弾いていた。そのうち夏休みに入り、毎週水曜日弘明寺で練習が行われた。八月の初めには白樺湖でキャンプがあり、十一人が蓼科山に登山した。その十一人の中に僕が居るわけである。（なぜ登ったのかは、いろいろわけがあったのであるが余りにも個人的になるのでよそう）

九月に入ると鹿沢で合宿が行われた。今年の冬の合宿と同じように班別で基礎練習、合奏をした。僕は吉津さんの班でキュープナーのアンダンティーノ等を合奏していたので、かっこいい曲をやっている他の班がうらやましかった。夜は班別でミーティングがあり、その後全体のミーティングがあった。合奏よりも何よりもこの合宿で印象に残っていることはモンキーダンスをやりはじめたことである。レコードプレーヤーを中心にして池畑、野津山、後藤氏や僕が腰を振り出すわけである。最後の夜は後藤さんの誕生日だったので男子数人でインスピレーションをやってイッシッシであった。そのあと、他の部屋で二十人くらいで銭まわしをやって徹夜をした。十

円玉がだんだんきれいになっていった。今から考えればバカバカしいことであるが、翌朝みんな  
で散歩したときの気分はいまだに忘れられない。

合宿から帰ると、食堂、部室に集まる人数もふえ、にぎやかになった。部室といえば、以前は  
半坪程で、男女十人位が入り乱れて、ヒザをつき合わせて談笑したものである。工学部の二、三  
年生がよく来ているのでみんなヒマなんだなあと思ったものだ。この後十月に入ると試験があり、  
それが終わると大学祭の準備に忙しくなるのだがそれは次号にゆずろう。

ギター部沿革史（六）－昭和40年秋から昭和41年春－ 安藤一之

クラブ沿革史は七号で私が一年の時（昭和四十一年）の大学祭前まで書いてそのままになっていたのであるが、今回その続きをまた書くことになった。私が書くことになるまでには色々事情があったわけだが、途中でやめた責任を取ると言う形で私になったのである。四年も前のことなので記憶が確かでないかもしれないが、その点は了承してください。

前期試験も終りいよいよ大学祭である。この年から模擬店「ロシータ」を二ヶ所で開店することになった。一つがバーでもう一つが喫茶店でギターの生演奏をするわけだ。私は喫茶店の方にかかりっきりで二日間、他の展示など一つも見に行かなかった。開店前夜は徹夜で準備をした。後藤氏がバーの、野津山氏が喫茶店の責任者だったと思う。模擬店は非常に盛況で、すごい忙しきでコーヒーがなくなった、砂糖がなくなったという度に清水ヶ丘の坂を降りたり登ったり、くたくたになってしまった。それでも面白くてしょうがなかったのだろう。次の年の模擬店の責任者を希望してまた二日間くたくたになるまで働いたのだから。

大学祭が終わるとまた練習が始まる。第一回県ギ連新人発表会のためである。杉村君の指揮で「月見草の花」「ジプシーの月」「キューナーのロマンツェ」を演奏した。その後は一月にあるフロイデ・ハーモニー演奏会（国大の音楽サークルの合同演奏会）のための曲を上級生と初めて一緒に練習した。上級生のうまさを知らされ、何とか追いつこうとがむしゃらに練習したのもこの時である。

冬休みには千葉の館山で合宿があった。もちろん演奏会のための練習で、遊ぶどころではない。私は2ndであったが、同じパートにいた鳥海君は入部して一ヶ月しか経っていないので大変苦労していたようである。その鳥海君が今ではすごいテクニックの持ち主になっているのである。

フロイデハーモニー演奏会ではベートベンの第九の前にギター部が演奏し、いわば前座のようなものだったので、少し惨めな気持ちを味わったのである。その後定演の練習に入るわけであるが、学芸学部名称変更ストに入り、定演開催が可能か否か議論をした。反対意見の人もありいたし延期という意見（私もこの意見に賛成していた）もあったのだが、その後追い出しコンパ（竹本氏、原氏、笹野氏、福井氏が卒業）の時、上級生の中で定演を行うと決まったと聞かされた時は「ありゃ」と思った。この頃はまだ上級生が「そうするんだ」と言えば下級生も「そうするんだ」と思うような時だったのだろう。

追いコンが終わり、三月には鎌倉の光明寺で合宿をし、木魚などをたたいて騒いだのを覚えている。またこのときの合宿は、ベニヤ板一枚程度で男女が部屋を分けていたので、男子が夜な夜な話すよからぬ話がどうも女子のほうに聞こえたらしい。四月にはいよいよ新入生（中沢君達）が入ってくるのである。どんな女の子が入ってくるか希望と不安（？）に胸をどきどきさせていたのは私だけだったのだろうか。

〔追記〕この沿革史は代々色々な人によって書き継がれているものであり、今後も続けられることを望む次第である。

ギター部沿革史（七）－昭和42年春から昭和43年春－ 中沢 国夫

トシのせいかわれっぽくなりまして、沿革史を頼まれましても新入生のときの事を思い出すのは、とても叶わないので、僕が二年生のときの事を書き散らすことで、今回の責任を果たしたるものとさせてもらいます。

#### <第一回東京演奏会>

東京で初めての演奏会を開催するに際し、当時の執行部の苦労は、並大抵のものではなかったと思います。開催日を十二月に決定するにしても、それまでの練習日程でプログラムを全部消化できるかは終了するまで予知できませんし、券の販売への不安もあれば、舞台の音響も気になるところでもあります。又新入生の面倒も好い加減にはできないでしょうし、一方で合奏中心になったクラブの在り方に疑問が生じれば、それに答える執行部の態度も固めておかねばなりません。全てが初めての経験ゆえの難しさであります。だからといって、第二回以後に与える影響も考慮すれば、第一回演奏会には失敗は許されないといった決意も執行部には要求されていたかも知れません。

三年生の精神的負担の大なることは想像に難くありません。秋田さんが、その時記していた手帳を、後日参考のために見せてもらいましたが、驚くほど綿密なものです。

当日までの練習日を四十日(?)とし、一日の練習に何曲練習できるとすれば何日目までにどれとどれを完成させるとか……。

すべてがこんな具合です。

考えれば第二回以後の東京演奏会なんて楽なものです。一度敷かれたレールをたどればよいのですから。

#### <夏季合宿>

そんなわけで土合の合宿は、大変厳しい毎日でした。管弦楽組曲第二番は楽譜を見ればわかりますが、4th といえども二年生にとってはかなり難しく、Part Master が秋田さんということもあって、練習時間ぎりぎりまでギターを離せませんでした。氏は、こと練習に関してはインケン（語弊がありますが、クラブでは良く使われている軽い意味でのインケンです。）なんで、一人一人弾かせることを好み、間違ったりしますとあのギョロ目（語弊があります。秋田さんは美男子であることを氏を知らぬ人のために断っておきます。）が、一層にらみをきかせるのです。氏に限らず、押しなべてPart Masterはインケンでした。しかし僕はインケンになれない人はPart Masterになるべきではないと考えております。“インケン”とは非常に含蓄のある言葉かと思います。

#### <コンパの女装>

厳しさばかりが、夏季合宿の目的ではありませんから、コンパもあれば、ハイキングもありました。

夏季合宿のコンパには二年男子による女装がつきものです。女装は男性がやるものだからとい

っても、やはり品というものがなければいけません。エロならまだしもグロはいけない。当人達がグロとは思っていないことが救いと言え言えるのですが、それだけに罪は重い。又男性が演じるとはいつても、女装と言うからには色気が無くてはなりません。私見を述べさせていただくなら、女性の男装が可愛いように、男性の女装は女性よりも色気をよく表現し得るものです。昨年、一昨年の女装に一人として色気のあったものは居りません。一步譲って色気があったとしても色気の押し売りはいけない。女装の出演時間は短ければ短いほどいいのであって、サッと出てサッと引込む、このコツを忘れないことが肝要です。その点僕達の女装のときは色気があると言われたものです。ダラリと開けた口とうつろな目をした某男子部員の写真は何よりの証拠です。鷺尾君のシュミーズ姿は露出部分が多すぎる点で色気を相殺した嫌いがありますが、総じて僕らのあふれる色気は他の余興を圧倒したものです。

#### <ハイキング>

合宿のレストハウスから一の倉沢麓まで、途中川あり、花ありの美しい山道をハイキング。“日立のオジサン”なるアダナが生まれたのは、このハイキングだったと記憶しています。日立に就職が決定していた松野さんが日立の帽子をかぶっていたのを見て、新入生の女子が命名したのでしょう。グチではありませんが、どうもこのクラブでは男性に“オジサン”とか“老けている”とかいうアダナをつけることが好きなようです。“老けている”といえ、このハイキングで新入生の女子が、歌を歌いながら歩いていましたが、新鮮で大変よろしい。どうも女子は上級生になるに従って“老け方”が早いようで、歌を忘れたと言いますか、歌うことに抵抗を感じていると言いますか、自らをして、目を“老い”の方のみ向けているようです。男性諸君、どうでしょう、この際“オバサン”という？アダナもはやらせたら。カナリヤは歌うからこそカナリヤである。“歌う”とは非常に含蓄のある言葉かと思えます。

#### <指揮者>

練習を通して印象の深い人と言え、杉村さんが先ずあげられます。

指揮者として杉村さんが優れている点は、一つに指揮中（練習中での）顔の表情ではないでしょうか。合奏がうまくいった時に表わす何ともうれしそうな微笑が、僕達をしてもう一度良い演奏をと奮起させるのです。この女心にも似た僕達演奏者の心理を、よく心得ているのです。心得ていると言うよりは無意識の業かもしれません。ニクイ人です。全て指揮者はこうありたいものです。pもfも“静かにしろ”とどなりどなりして出来上がったp、fであれば意味がありませんし、微妙なmp、mfも奏せるものではないでしょう。今後の指揮者は杉村さんによって、更に顔の表情の研究という課題が提供されたわけです。

#### <名演奏>

第一回東京演奏会での池畑さんと吉津さんの“ロシアの思い出”はギタークラブ史上特筆されるべき名演奏でした。このコンビによる二重奏は今後、絶対（語弊があります。ただ、この言葉を見て後輩がナニクソと思うならば、僕の願うところです）望めそうも無いような気さえします。卓抜したギター技術、音楽に対する真摯な態度、なにかなくギタークラブへの深い愛情が、名演奏に繋がったのだと思えます。

本番を控えての数日前、リハーサルのロシアの思い出が最後の f f にかかったとき、強い弾弦によって池畑さんの取り替えたばかりの一弦が、プツリと切れました。

『折角いいところなのに・・・本番ではこんなことはやりませんから』実際、こういう余裕を持ちたいものです。

福村さんのタルレガも、氏一流の甘く美しい音色とともに、忘れがたいものです。最後になりましたが、国大管弦楽部の中村さんが、管弦楽組曲二番でフルートを引き受けてくれましたことも、沿革史の記念すべき一ページとして記しておきます。

昭和四十二年度の思い出として、定演、春季合宿等書かねばならないものがまだ多くありますが、それは次号に譲りたいと思います。

第5代OB会会長吉津君よりギター部沿革史の執筆を依頼されました。

ギター部の誕生は昭和37年6月であり20数年経過した今、当時の記憶もあいまいで資料も手元に無いので私の話はギター部の歴史というよりも部創成期に係わる諸処の出来事を部員を中心としたやや感傷的な思い出話として気楽に読んでいただきたいと思います。

大学入学後私は演劇部に入部しその部活動を適当に行う事以外はギターを弾くか飲み歩くかして過ごしていました。

音楽的な才能や感覚が特に優れていた訳でないのですが、ギターはいつも私の感性を揺さぶり無限に魅惑的な世界へと誘うのでした。

この世界を共有する仲間がいれば更にその世界が拡がり、彼らとは単に音楽上の付き合いだけに留まらず一生を通して人生の支えにもなり得る友となるに違いないと考え、ギタークラブを創ろうと決心しました。

同年6月創立記念日が終わったある雨の日、当時演劇部にいた1年後輩である増田治男君（建築科、現川鉄社員）の協力を得て、清水ヶ丘の学生食堂にギター音楽を収録したテープレコーダーを流しながらギター同好会の結成を呼びかけたのがギター部の始まりです。

その説明会には30名程度出席したのですが、指導者である私のギター技術は未熟でレパトリリーも狭く活動方針も暗中模索で頼りないものであったのか、夏休みを迎える頃になると部員は数人程度に減っていました。

2学期に入り細々とした練習活動を続け大学祭を迎えました。大学祭ではささやかな演奏会を教室で開くと共にギター音楽をバックとしたカクテルバーを模擬店として主催しました。

店名は確か「ロシータ」であったと思いますが演劇部の全面的な応援を得て可能な限り華やかな店としたせいか数ある模擬店の中でも最も人気を得た店となりギター同好会の存在を大きく学内に知らせました。その直後数名の新入部員が新たに入部しましたが私にとって忘れることのできない3名の人物が我が同好会に参加してきたのです。

その人物は私の1年先輩に当たる、坪川靖彦氏、伊達邦男氏の両名と同輩である田中祥弘君の3名です。

坪川氏は情熱的で繊細な感覚の持ち主で我が部員に的確な指導を施したので部のギター技術は相当な進歩を示しました。

又彼は幅広いギターの素養があり、特にタルレガを中心にしたスペイン近代音楽の世界に詳しく「アランフェス協奏曲」を始めて私たちに紹介しギター音楽の拡がりを教えました。

伊達氏はソルやバロック音楽に通じその模範的な演奏は典雅で奥深い世界へと私たちを導いたのです。

田中君は私の唯一の同輩として、ややもすると挫折しがちな私を陰に陽に支え励まし、ギター部に一本の筋金を通し不安定な初期の部を落ち着かせるのに大きな役割を果たしました。

彼は六尺豊かな偉丈夫で戦国武将を思わせる風貌の持ち主でありながら、心根は優しく私個人

の悩みを良く聞き入れただけでなく最後までギター部全体を大きな愛情で包み込み部の守護神のような存在として部員全体に安心感を与え続けたことは当時の部員の誰もが認めることでしょう。

同年 12 月彼ら 3 氏の支えを元に演劇部員を仮想部員として付け加え所定の部員数を確保し部への昇格を申請した所、あっさりとして認定され、ここにギター部が正式に誕生することとなったのであります。

明けて昭和 38 年 3 月ギター部第 1 回合宿が静岡市郊外の洞慶院で行いましたが参加者は坪川氏、原、笹野の両君と私の 4 名で初日にギターに関する話から人生諸般に渡る話を夜遅くまで行い、翌日合宿を切り上げ現地解散しましたが坪川氏ははるばる兵庫県西宮の私の実家を訪ねそこで 1 週間程ギター三昧の生活を過ごしたことが合宿の内容でありました。

なお、創設時のメンバーで最後まで残ったのは、上記 3 氏は別として、原、笹野、小山、福井君の 4 名であります。

4 月新入生は 20 数名で部員は名実共に 30 名程度の程よいメンバーとなりました。

新入部員の中でラテン音楽が得意で飛びぬけた技巧の持主である一人の人物が目につきました。

彼のギターテクニックは素晴らしく幅広い音楽の素養を持っていたので一体高校時代受験勉強等をしたことがあるのかと訝るほどの腕前です。

彼は機械工学を専攻しながら現在は音楽の世界を天賦としている池畑久之君です。

やがて建築科の竹本君が入部して来ました。

竹本君のギターは堅実でゆるぎないリズムを刻みどんな難曲でも必ず征服する粘りを示します。

華麗で明るい池畑君と重厚で信頼感に満ちた両君は以後の部の発展のため大きな力を発揮し、そのためか両君共卒業を 1 年延期してくれた程であります。

ギター部は単にギターを弾くだけの集団としてよりもむしろギターを通して青春や人生を真剣に精一杯生き抜くことをその目的とするような雰囲気生まれ部としてのまとまりは他のどの部にも劣らないものとなり部員は参加するだけで充実した時間が過ごせたように思われ練習その他の行事の出席率は十分満足すべきものとなりました。

その年度からギター部は着実な活動をするようになり、6 月の創立記念祭や 11 月の大学祭にも県立音楽堂で演奏を一般に公開することができるようになりました。

我々は亘理教授を部の顧問先生として迎えギター界の巨匠である小原先生の指導を仰ぎ門下の小原聖子先生と渡辺先生が我が部員を直接指導して下さったこと等の助力を得て初期ギター部の基礎が確立され翌昭和 39 年 4 月の第 1 回定期演奏会へと実を結んでゆくのです。

私は、1965年5月29日部長を受け継いだ。先の部長は、工学部機械工学科の一年先輩でもある笹野悟氏であった。笹野さんには、入部してからも大変お世話になったわけだが、卒業10年後、私の結婚の仲人としてすべて面倒を見ていただくとは、夢にも思わなかった。

ギター部は金先輩が創設されてから4年目を迎え、部員も50名を超え、私が入部した当時とは比べものにならないほどの成長ぶりであった。学内でもその存在が認められるようになり、活動にも巾が出てきた反面、多人数ゆえ意見の統一が難しくなってきたのも事実であった。これは、同好会から始まった家族的な集まりが、部としての組織にまで発展したという実感でもある。

6月中旬、新入生歓迎会で箱根に行った。雨にたたられ、新緑を堪能することはできなかったが、バスの中は終始宴会のノリで非常に盛り上がり、充分親睦の役目を果たしたようである。夏にかけては、新入生に対するクラブ意識の浸透のため、週に2回の練習と、暇を見つけては部室に集まりそのまま授業にも出ず、横浜駅西口の喫茶店に“チンボツ”と銘打たれたごとく、寄り道をしては、ギター談議に花を咲かせたものである。

夏休みには、霧ヶ峰、蓼科山にサマーキャンプに行った。この催しは、その前年から始まったのだが、常に遊び心を忘れないギター部の精神から生まれたもので、要するに、理由をつけては皆が集まるキッカケが欲しいだけなのである。サマーキャンプのあとは、夏の合宿である。当時のギター部は、各地からの出身者が多かったので、皆が戻ってくる始業直前の9月上旬に行った。今回は、2年前に来た思いで深い群馬県鹿沢の湯の丸ロッジである。前回と比べ53名という大人数のため、当然ロッジは貸切となり、思う存分合宿生活に浸りきった。1週間という長い期間だったので、練習もしたけどよく遊んだと思う。環境が良いので、湯の丸山を始め近くの山をハイキングに出かけ、夜は寝る間も惜しんでマージャンや室内ゲームに熱中し、果ては当時流行のモンキーダンスを全員がまるで狂った猿のように踊ったのは、今でも懐かしく思い出される。

夏休みも明け、いよいよ大学祭の準備で忙しくなってきた。しかしその前に、ギター部にとって大変意味深い出来事が進んでいた。半年前笹野先輩から引き継いだ重要なテーマ、部則の設立である。人数が多くなったが故、ファミリー的な雰囲気はモットーだったギター部にも、運営上どうしても規則が必要となってきたのである。それは、ギター部発展の証と考え、9月25日部則を制定した。

10月30日から大学祭が始まった。音楽演劇祭に出演することも大事だが、我々にとっては模擬店“ロシータ”の開店のほうが大変なのである。各部が必死になって客集めに工夫を凝らすため、負けてなるものかとギター部も生演奏と最新のステレオ装置、そして部全員がホスト、ホ

ステスとなって客集めをやってみたが、やはり一番飲んで騒いだのは、我ら部員だったのである。

大学祭も終わり、一段落と思っていたが、11月下旬には神奈川県学生ギター連盟の新人発表会、12月下旬には神奈川県ギターフェスティバルに参加した。そして中旬には、1年前戸田の合宿で偶然親しくなった明治学院大学マンドリンクラブと交換パーティを行った。このパーティには、現会長の吉津君をはじめ、2年生が大変積極的であった。

年末も押し迫って、冬季合宿に入った。千葉県館山で行ったこの合宿は、国大の全音楽サークルの合同祭“フロイデハーモニー”の一部で、ギター部の演奏を披露するためのものであった。この時の第二部で行われた、ベートーベンの第九は、見事なものであった。

さて、いよいよ第3回定期演奏会を2ヵ月後に控え、鎌倉光明寺で合宿を行った。なにしろお寺の施設だから、食事は質素、布団は臭いのしみついたせんべい布団、窓を閉めても風が入り、3月の下旬なのに、ギターを弾く手がかじかんでしまった。従って、練習したというよりいつものパターンであるマージャン、トランプが始まり、鎌倉の海辺で縄跳び、そしてリンボーと、ギター部の連中は本当に遊びの名人だと感心したものである。

4月、新入生を迎え、いよいよ定演の最後の調整に入った。5月14日(土)、神奈川県立音楽堂で第3回定期演奏会を催した。今回は4部構成にし、クラシックからラテンまで幅広いジャンルをこなした。

第一部 合奏(クラシック) 指揮:松村

ハ長調組曲 F. カル

古典舞曲 メヌエット J. マテゾン  
キセノフォン P. E. バッハ  
トリオ J. S. バッハ  
アリア G. F. ヘンデル

第二部 独奏・重奏

練習曲 14 F. ソル 吉津 知  
19 F. ソル

二つのメヌエット J. R. ラモー 池畑 久之  
メヌエット第6番 F. ソル

アンダンテ A. ビバルディ 榎本 武明

プレリュードとクーランテA. ビバルディ 福村 睦

ロビンとエスパニョレッタ古典舞曲 竹本・坪川・笹野  
ガリヤルダ 原・田中・福井

### 第三部 合奏 (セミ・クラシック)

シェラモレナ	S. ガルシア
ボレロ	マルトレル
エルビート	スペイン民謡
パッサカリア	ボッシュ
エスパニアカーニ	マルキーナ

### 第四部 合奏 (タンゴ)

真珠採り	G. ビゼー
夜のタンゴ	ベックマン&ボルクマン
センチメント ガウチョ	F. カナロ
夜明け	R. フィルボ
オレガッパ	A. マランド

幕が下り、拍手が鳴っている。今まで経験した演奏会とは全く違った感動が、胸の奥から込み上げてきた。皆の満足そうな顔が、とても印象的であった。

私は、この時から催し物の魅力に取り付かれたような気がする。定演も終わり、5月末、第5代部長の吉津君へバトンタッチしたが、私はその後人より一年多くギター部に籍を置く事になり、5年間悔いの無い生活を送る事ができた。同期で副部長の榎本、指揮の松村、先輩諸氏、そして時を共に過ごした後輩諸君に、今でも心から感謝している。

私は、ヤマハに入社後1年間だけ機械設計に勤務したが、その後現在に至るまで、音楽イベントの企画、宣伝、渉外などほとんどギター部の延長のような仕事を行ってきた。それだけギター部に籍を置いた5年間は、私の青春のおもいでであり、また人生の指針だったのかもしれないと、改めて今それを感じている。

今後のギター部の発展と後輩諸君の活躍を心から期待して、ペンを置くこととする。

5期生が執行部になったのは第3回定演直後の昭和41年5月のことで、既に20年以上の年月が流れたことになる。従って記憶違いの面も多々あると思うが、アルバム等を見ながらその後の一年の事を回想してみたい。

何はともかくまず思い出されるのは演奏旅行を控えた合宿中における加藤健一君（6期）の長野県美鈴湖での遊泳中の事故死である。私は合宿出発日の前から体調を崩し、自宅の床で安静にしていた8月8日の夜、当時副部長の野津山君から“加藤君が遊泳中に行方不明になった”という連絡を受けた時の衝撃は今でも忘れられない。翌日、“残念ながら加藤君は水死体で発見され、部員の動揺も著しいので演奏旅行は中止したい”旨の連絡を受け、居ても立ってもいられず松本へ駆けつけた。何と云っても辛かったのはそこで加藤君の御両親にお目にかかり、何と謝り、何とお慰めしたらよいかという事であった。もっとも私よりもっと辛い役を演じなければならなかったのは、最初に加藤君宅へ事故を知らせなければならなかった野津山君であったことは想像に難くない。ただ私が駆けつけた時はすでに当時ギター部顧問をお願いしていた亘理教授も現地に来ておられ、こういうことの経験の無い我々の大きな心の支えになっていただいた。

この事故で加藤君の御両親の受けられた悲しみに較べれば云々すべき話ではないと思うが、ギター部創設者の金先輩の念願の夢でもあった演奏旅行が中止されたのは残念で仕方ない。多分この演奏旅行が成功していれば、その後何回かにわたって演奏旅行も行われたのではないだろうか。特にこの演奏旅行のためにはかなりの私費も投げ出し、その実現にご努力いただいた第4期部長の池畑先輩にとっては、一度も口に出された事は無かったが、さぞかし残念の極みであったに違いない。また演奏旅行中止に伴い、地元出身とのことから松本での柳沢君（5期）、富山での福村君、松野君（5期）、杉村君（6期）を始め、後始末に奔走してもらった部員の方々が、病人の身であった私にはどんなに頼もしく思えた事か。

いずれにしても、加藤君を御存知の部員の方々と一緒に改めて彼のご冥福を祈りたい。

ところで、最近の現役の定演等を見に行くと、部員の少なさに正直なところ一抹の不安を感じる。それに引き替え当時は幽霊部員も入れると部員数は優に100名を超えていた。Folk Songがはやり出し、ギターがもてはやされる時期でもあって黙っていてもそこそこの部員は集まったが、それでも4月に可愛い新入生を見つけるや男子部員が数人取り巻き、一所懸命入部勧誘をしたものである。現在は価値観も多様化してサークル数も多いし、その面で部員獲得が難しいと思われるが、是非ギター部を絶やす事のないよう現役部員の皆様には頑張ってもらいたい。

またこの頃は他校との交流も盛んで、前年の春の合宿以来交流が始まった明治学院マンドリンクラブと6月に中津川溪谷で合同ハイキングを行った。話は飛ぶが、当時そのクラブには女優にでもしたくなるような美人がおり（すいません、我が部にも沢山美人がおりました）一時我が部の男子部員の間で噂が絶えなかったようであるが、今はいいオバサンになっていることだろう。

7月に1、2年生の独奏発表会を南区公会堂で開催した際も、彼らは来てくれ、マンドリンとギターの合奏を聞かせてくれた。このとき演奏された“古戦場の秋”（小池正夫作曲のマンドリンオリジナル曲）に魅せられ、後藤君（5期・指揮者）は第4回定演でギター合奏にその曲を選曲したようである。

一方6月には上智大学のソフィアギターアンサンブルの横浜公演の賛助出演を依頼され、スペイン音楽を披露したこともあった。ただ、その演奏会で夕食に弁当を支給してくれると言った話が、何時の間にかうやむやになってしまい、良い印象を持たないまま彼らとの交流もそれっきりになってしまったのは残念である。

また、当時横浜市立大学と神奈川大学とともに、神奈川ギター連盟が結成されており、松野君が委員長職にあったこともあるが、現在でもその連盟が存続しているのは喜ばしい限りである。

一昨年、現キャンパスが私の実家から歩いて15分位の所にあることもあり、家族をつれて、十数年ぶりに大学祭を見に行った。見に行った時間が昼間であった事や清水ヶ丘に較べるとキャンパスが広い事などもあってか、閑散とした感じで、正直なところ若干拍子抜けしてしまった。ギター部の出店が確かタコ焼き屋であったが、それ自体無論悪いという訳ではないが、昔ながらのロシータがなくなっていたのは寂しく思えた。

当時ロシータは2店構えており、1店はギターの生演奏を聞かせる喫茶店（教室を一室借用）ともう1店は大人のムード漂うバー（外にテント張り）であった。どちらもチケット前売りや店の準備等それなりに大変ではあったが、なかなか楽しいものであったように記憶している。せっかく両店で働いて稼いでも最終日の夜、皆でテントの中でタダ酒を酌み交わし、結局は毎年赤字を計上していたような気がするが、特に飲兵衛の私にはそれが大きな楽しみであった。

さて、時が前後するが、楽しかった合宿の思い出に触れてみよう。

恒例として合宿は夏、冬、春の各休み中に行われたが、この年は大学祭の音楽祭を控えて前後期中間の休みにも合宿を行った。秋は葉山にある確かキリスト教関係の研修所のような所で、名前は忘れてしまったが、朝パン食で女子部員に好評であったことと、ハンモックのようなベッドで寝かされた事が記憶に残っている。

冬は千葉県の大原にある国民宿舎であったが、我が5期生がコンパにおいてファッションショー（男子が女装、女子が男装）を行い隠し芸大会で優勝した以外は余り記憶に無い。

春は第4回定演を控え、伊豆の戸田で行い、桜が満開の折、田島先生にも来てもらい、いろいろ指導していただいたことを思い出す。現在OB会員名簿を見ると42名21組のカップルが誕生しているが、とにかく合宿となると、どうも男女の仲が怪しくなる事が多かったようだ。もっとも年頃の男女は寝る部屋が違うにしろ、同じ屋根の下に生活するのであるからそうなくても不思議ではないのだろう。夜物陰で口付けをするカップルもあれば、目に涙を浮かべてしくしく泣いている女子部員が出たり、当時この種の色恋ごとに無関係（関心は大いにあったが相手にされ

なかったという方が正しいでしょう)であった私にとっては、他の部員に悪影響が出ないように、ただオロオロしていた気がする。それでも21組もの夫婦を誕生させたギター部はある意味で素晴らしい役目を果たしたと言えるのではなからうか。

先ほど当時の部員数がかかなり多かったというお話をしたが、それでも昭和42年3月の追い出しコンパで追い出されたのは小山さん(何故か3期)、松村さん、榎本さん(以上4期)、のわずか3名になってしまったのは寂しいものであった。ここに池畑さんが追い出される側に居られなかったのは、学業を犠牲にしてギター部の発展に尽くされた事に他ならない。

最後に第4回定演の思い出を少々のべてみたい。

開演は5月3日(憲法記念日)午後2:00神奈川県立音楽堂という当時としては、ベストの日、時、所が決まった。これは私の記憶だと旧姓桑原さん(7期)が非常に高い倍率の中、うまくじを引いてくれたため実現できた。5月3日の定演がベストという意味は祭日なので沢山の入場者が期待できたこともあるが5月20日に卒業設計の提出をしなければならなかった私にとってもベストの日であった。もし5月20日頃に定演となれば私も小山さん、池畑さんに続いて機会工学科の伝統になりかけていた留年の可能性も強かったが、定演後約2週間製図板に座り続け、どうにか合格する事ができたのである。

話が少々ずれたが、各部員が入場券(150円)の販売に努力してもらい、確か1300枚位は売ったと思うが、当日の入場者も1000名を越え、大盛況出あったと言える。プログラムはクラシック合奏(序曲:グラニアーニ、七つの舞曲:ヘンデル)、独奏(主題と変奏:ヘンデル、“牛を張り番せよ”の主題による変奏:ナルバエス 以上私吉津知。前奏曲2番、アラビア風綺想曲:タルレガ 以上福村睦君)と重奏(プレリュード:ヴィヴァルディ、ソナタニ長調:スカルラッティ、安藤君・金子君(6期))、邦人作品合奏(アイヌ風舞曲:鈴木巖、千鳥、古戦場の秋)、タンゴ合奏(碧空、淡き月の光、エルチョクロ、ヴィオレッタに捧げし歌、夜のタンゴ、台風)と4部で構成された。なお、最後に加藤君の追悼曲として三角帽子を演奏したが、当日加藤君のご両親もいらしていただき、沢山のお祝いを頂いたことを覚えています。

定演後は大コンパを行ったが、その前に音楽堂の前で全員で写真をとった。その写真を見ると数名のOBの方々もおられたが、役100名の部員の顔が写っている。申し訳ないが全員の名前は出てこないが、全員の顔は私の記憶にあり、一人一人のことが懐かしく思い出されて来る。

この定演を最後に秋田君(6期)にバトンタッチをしたのである。(了)